

系 東

編集 山形村ふるさと伝承館



兵太郎公園

昭和五年発行の『永田兵太郎
翁記念遺話』に

「東より九段の石段を登り右
方に料理店あり左方に舞宮あり、
それより二十七段の石段を登り
桜の木数多あり、左右に牛の銅
像あり左方に遺訓碑あり・・・
それより二十五段の石段を登り
明治神宮あり・・・それより山
の中腹を北に行けば鐘樓あ
り・・・」

と記された通稱「兵太郎公園」
が 昭和六二年永田歌子さんの
善意により村へ寄贈された。

村ではそれに周辺の土地を合
わせ、約一億四千万円の巨費を
投じて拡張整備し、「鷹の窪自然
公園」として造成、昨年十二月

写真で見る 永田兵太郎翁

善光寺仁王門

善光寺大勧進日誌によれば明治二四年、大火で焼失した善光寺の仁王門は、大正三年一月永田兵太郎翁の再建浄財寄附の申し出により同年一月五日起工式を行なった。仁王門建築は大工棟梁に福井県武生町師田庄左衛門を依頼し、必要材料は福井・滋賀・新潟・山形等の各県から集めることにした。そして五年の歳月を要して大正七年三月三十日落成式が行なわれた。

費用は木材・大工手間賃・地固め石材・付帯工事等合計六万四千円余、使用した人数は大工・彫刻・木挽・

鷹職・石工・瓦職等合計二万五千人余であった。しかしこの時、中に安置する仁王尊像はまだ出来ていなかった。東京上野公園の西郷隆盛像等の制作で知られた高村光雲に依頼していた仁王尊像が完成し、開眼大供養の行なわれたのは翌八年の九月であった。



その碑の右側には山形村への寄附目録が刻まれており、小学校運動場、同農業実習地及び山林の面積や役場庁舎並に文庫附属物一式と石橋二十有余ヶ所架設などが記されている。

碑の左側にはまず「勅定の紺綬褒章を賜ひ以て表彰せらる」とあり、続いて、日本赤十字社、済生会及び大日本武徳会からの受賞事項が刻まれている。

そして裏面には「目録寄附に対し山形村より金杯三ツ組を贈与され表彰せらる」とあり、次の歌二首が刻まれている。

国がため家のためとてひたすらに
田畑につくし山え木を植う
こゝろ休まず培ふ甲斐はやがて豊
かに実る稲

紺綬褒章之碑

善光寺仁王門建築費等の寄附行為により紺綬褒章を賜った兵太郎翁は大正一二年六月、山形小学校の運動場前に「紺綬褒章永田兵太郎之碑」を建立した。



兵太郎翁略年譜



嘉永六年（一八五三） 丑年

三月一三日 小坂の地主永田助五郎の二男として生れる。
兄文吾一六才、姉よう三才

慶応二年（一三才）

兄と不仲となり、一五才になつたら江戸に上がり立身出世をはかろうと決心する。

明治元年（一五才）

二月兄病氣になり、兵太郎は一日おきに今井の梶原匠者の所へ薬を取りに通い、江戸出府不能となる。

明治二年（一六才）

正月六日兄三一才で病死、兵太郎は家を継ぐ立場となり、早くも村一番の大地主である本家を越える地主となるには、どうすればよいか苦心する。

明治五年（一九才）

大利益を得るには安いものを買い高価に売ることと悟り、小判の分拆や米と物との関係について研究調査を始める。

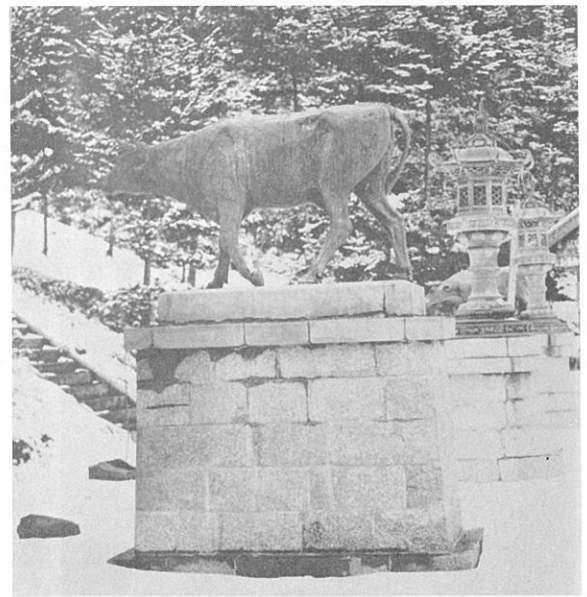
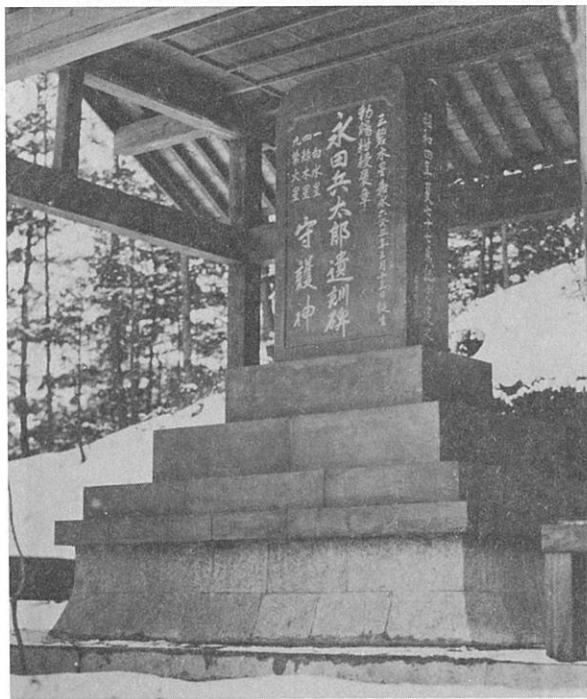
鷹の窪公園

公園の左手に昭和四年兵太郎翁の喜寿の記念に建立した「永田兵太郎遺訓碑」がある。表面には易学に凝っていた翁らしく「三碧木星嘉永六癸丑年三月十三日誕生」「一白水星・四緑木星・九紫火星 守護神」などとも刻まれている。注目すべきは裏面の「福翁遺訓」で、冒頭の「吾子孫は借金・預り金・貸金商法其他義務を負ふべき契約に対し保証を成す可からず」から始まって「名譽職は之を避く可し」とか「口は禍福の門なり熟慮して幸福を求めよ」など特異な処世訓が長々と刻まれている。その中に弁才天女・恵比寿・布袋・大黒天・相寿老人・福祿



寿・毘沙門天各々の徳を記した後「七福神は一致協力富貴繁盛の基なるべき諸徳を象徴せるものなり」とあり 七福神を深く尊崇した翁は、大正九年自宅の裏にある報恩碑の前に七福神碑を建て、大正十三年には七福神の銅像を鑄造し、公園内に堂を建ててそれらを安置した。

また翁は嘉永六年の丑年生まれであり、長男武一郎が大正十四年の丑年に母の胎内に宿ったことから牛を大切にし、武一郎の生まれた大正十五年には公園中央の右側に、翌々昭和三年には左手に牛の銅像を建てた。しかし、これらは先の七福神その他の銅製品と共に、太平洋戦争中悉く供出されてしまった。



明治八年（二三才）

この頃から安値の機をみて土地を買いようになる。

明治十一年（二五才）

この頃から易学の勉強を始め以後これに凝るようになる。

明治十七年（三一才）

遂に本家同等の大地主となり以後急速に所有地を増殖する。

大正二年（六〇才）

七月自宅裏に報恩碑建立

九月村内石橋二個寄附申出

大正三年（六一才）

一月善光寺仁王門寄附申出

一二月役場庁舎寄附採納

大正七年（六五才）

三月善光寺仁王門落慶式及び仁王門寄附者の像除幕式挙行

大正十二年（七〇才）

学校運動場前に紺綬褒章永田兵太郎碑建立

大正十三年（七十一才）

鷹の窪に明治神宮碑・鐘樓・七福神銅像及び堂など建立

昭和四年（七六才）

勅賜紺綬褒章永田兵太郎遺訓碑を鷹の窪公園に建立 福翁遺訓として特異な処世訓を遺す

昭和九年（八一才）

一二月三日 死去

村の文化財

— 清水寺の仏像 —

釈迦三尊

清水寺本堂内陣の向かって右奥、須弥壇の上に三体の仏像が安置されている。釈迦如来の脇侍に左（向かって右）に普賢菩薩、右に文殊菩薩を配した一般的な釈迦三尊である。釈迦三尊の中には釈迦の弟子迦葉と阿難を脇侍とする場合もあるという。木造彫刻で江戸期の作である。

釈迦如来像

梵名をシャカムニ（釈迦牟尼）といい、釈迦族の聖者の意味である。釈迦は紀元前六世紀のころ、中インドのカピラ城主の子として生まれたが、苦行ののち悟りをひらき、慈悲と智慧をもって衆生を済度した仏教の祖である。

この如来像の像形は禪定印を結んだ坐像で悟りの境地を表している。

文殊菩薩像

梵名はマンジュシリーの音を写して文殊師利・曼殊室利と書き、訳して妙吉祥菩薩とか妙音菩薩などという。釈迦の弟子として、その説法の座に連なった実在の人物だといわれる。菩薩中最も智慧がすぐれているといわれ「三人寄れば文殊の智慧」の諺もある。日本では子供に智慧を授ける菩薩と信じられている。常に普賢菩薩とともに釈迦如来の脇侍として向かって左に立ち、智慧門をつかさどる。普賢が象に乗るのに対し、文殊は獅子に乗り、像形は真言によっていろ／＼に作られる。

が、この文殊菩薩は右手に蓮華、左手に経巻を持った彫像である。

普賢菩薩像

梵名をサマンタパダラといい、サマンタ（三曼多）を「普」、パダラを「賢」と訳し普賢菩薩とした。文殊とともに釈迦の脇侍として、多くの菩薩の上首とされ、常に仏の教化済度を助けるといわれる。

釈迦如来の向かって右に立ち、慈悲門をつかさどる。滅罪延命の功德を有するので、延命菩薩ともいわれる。

文殊の獅子に対して白象に乗り、合掌または如意をとる姿が多いが、この普賢菩薩像は右手に宝珠、左手に蓮華を持った彫像である。

